

包括的な学校改善を推進するチームとしての学校づくり ～人材育成と人材活用の実践を通して～

登別市立幌別小学校
学 級 数 14
(校長 成田 浩司)

I 実践テーマの趣旨

本校では、平成24年度の試行期より、学校力向上に関する総合実践事業の実践指定校として、子どもたちがこれからの変化の激しい社会をよりよく生きるために必要な「知・徳・体」のバランスのとれた豊かな人間性の育成を目指し、「学び続ける学校」と「組織に貢献できる人材の育成」をテーマに包括的な学校改善に向けた実践を積み重ねてきた。

新採用教職員が、毎年複数名配置されてきたことから、OJTを基本とした人材育成システムをベースに若手教職員だけでなく、中堅、ベテラン教職員がそれぞれの力量を発揮し、資質・能力を向上させるための「幌小型メンター研修」を推進してきた。加えて、働き方改革を意識しながら、教職員が児童と向き合う時間を確保すべく、教育活動の効率化と質の向上を目指した学校運営ができる体制づくりを実践している。

また、今年度からは、学校力向上に関する総合実践事業の「地域指定」中核校の役割も担い、専科指導教員による高学年外国語科の指導や非常勤講師の活用による高学年理科の指導を通して、効果的な専科指導方法の蓄積に努めている。

ここでは、今年度の主な取組である「効果的な若手教職員の育成を目指した環境及び組織づくり」及び「専科指導教員及び加配教員の役割を明確にした効果的な活用」について紹介する。

II 効果的な若手教職員の育成を目指した環境及び組織づくり

児童に確かな学力を確実に身に付けさせるためには、教職員の授業力向上が不可欠であり、それらの基盤となるのは「学習集団」や「生活集団」の機能を有効に働かせる学級経営であることから、今年度は、効果的な初任段階教員の育成に向け、次の4つの取組を推進している。

1 OJTを意識した学年組織の編成

学年主任に中堅、ベテラン教職員を配置し、若手教員とのコンビで学年を組織した。学級経営は単発的な指導によって進めるものではなく、日常的・計画的な営みの中で児童に対する指導・称賛・励ましを積み重ねることが大切であることから、日常的に、学年主任である中堅、ベテラン教職員の児童への関わり方や指導方法を学ぶOJTを行うことで、若手教職員のスキルアップを図っている。

2 学年研修の時間の確保

学年主任と若手教職員がまとまった時間で向き合い、児童の様子や学習の進度、学習内容の理解度について確認したり、指導方法について話し合ったりする時間は、研修の場として重要であることから、毎週必ず「学年研修」の時間を確保している。

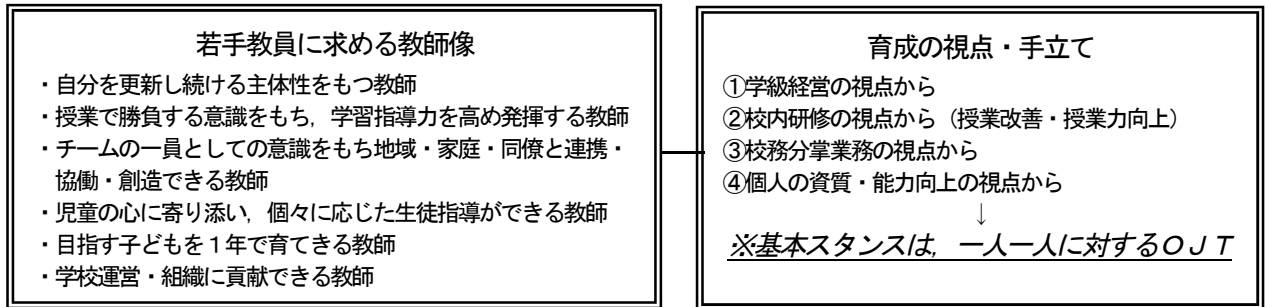
3 職員室の座席配置の工夫

職員の要望により、職員室の学年団の配置を「向かい合わせ」から「横並び」にした結果、学年内の報告・連絡・相談が活性化した。PCやプリント、児童のノート等を見せ合いながら話ができるようになっただけでなく、隣接学年が向かい側にあることで、情報共有や主任同士による連絡・調整等が容易にできるようになった。

4 メンターシステムの充実と改善

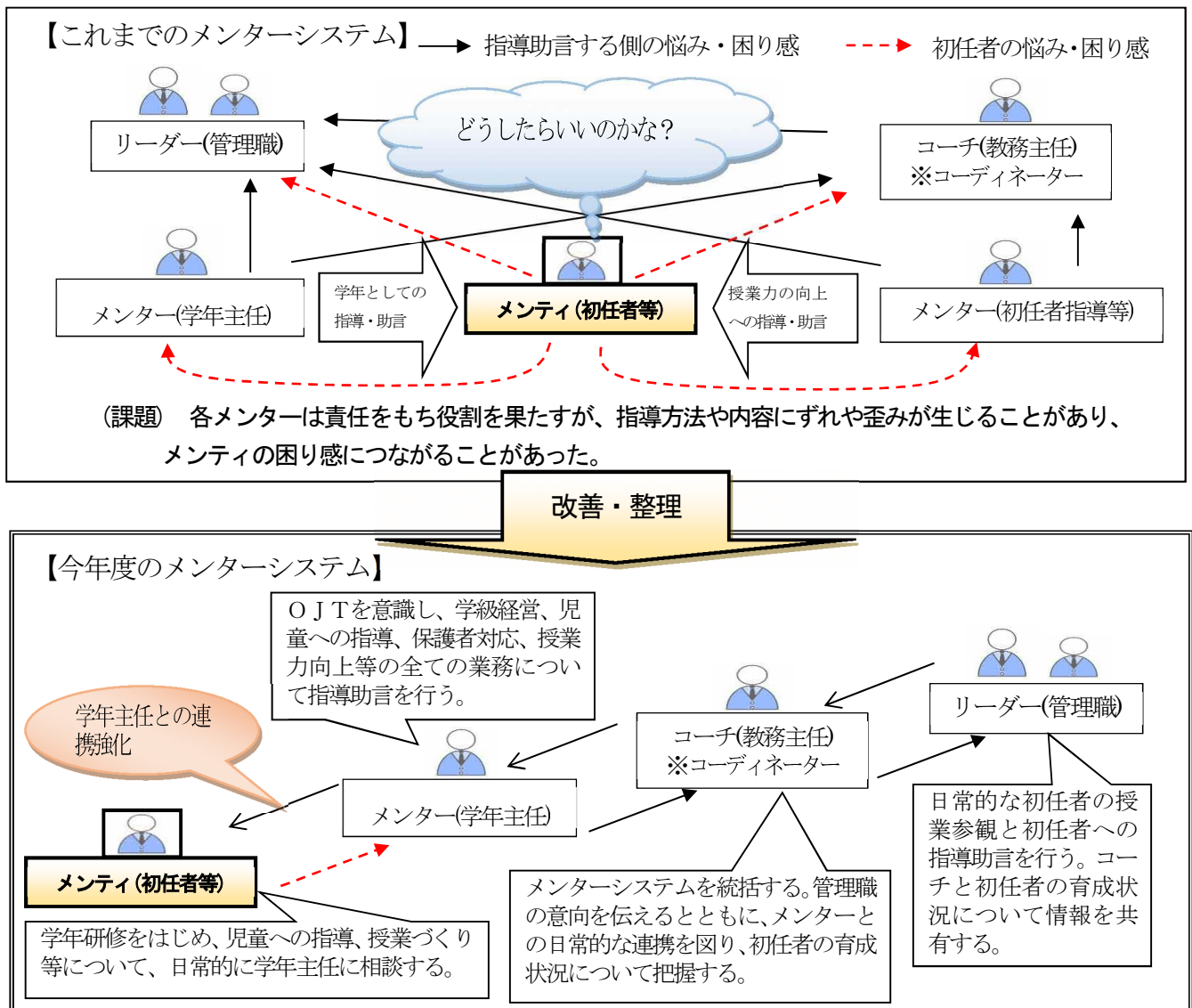
(1) 若手教職員に求める教師像と育成の視点・手立て

本校ではこれまで、若手教職員に求める教師像と育成の視点・手立てを明確にした人材育成に取り組んできた。特に、今年度は「学級経営の視点」「校内研修の視点」を重点にし、若手教職員の育成を図っている。



(2) メンターシステムの改善

昨年度までの学年主任と初任者指導講師をメンターとした指導形態から、学年主任をメンターとして位置付けた指導形態に変更した。指導経路の一本化を図ることで、初任段階教員の迷いや負担軽減につながるよう意図している。



学年主任がメインのメンターとして若手教職員の指導にあたるが、業務に関する直接的な指導助言の他、若手教職員の仕事上の悩みや困り感を受け止め、共感したり、共有したりするなど、心身の安定を図ることを目的に関わる場合も多い。本校では、これまでの学校力向上に関する総合実践事業の取組により、学校全体で若手教職員を育成する取組が根付いている。

対象教員(メンティ)	指導教員(メンター) 学年・学級の視点	指導教員(メンター) 校務分掌の視点
4年次2担 ※研修部	2年学年主任	研修部長
4年次5担 ※研修部	5年学年主任 外国語専科	研修部長
4年次栄養教諭 ※保体部		保体部長
3年次言語通級指導 ※指導部	言語通級主任	指導部長
2年次4担 ※教務部	4年学年主任 算数科TT	教務主任
2年次3担 ※文化部	3年学年主任	文化部長
期付1年次看護教諭 ※保体部		保体部長

【令和2年度のメンターチーム】



【メンター研修の様子】

(3) 若手教職員が学び合う「メンター研修」

4年次教員2名をメンター長として、若手教職員のみのメンターチームを編成しており、年7回のメンター研修を実施している。協議テーマはメンター長が取りまとめ、日頃の実践の悩み等を交流し、助言者（若手教職員、中堅、ベテラン教職員の中から選定）から、自身の経験等による指導助言が行われている。研修後、若手教職員の気付きや感想、学びをメンター長が通信等で発信することで、研修のフィードバックを行い、取組の共有化と実践意欲の向上につなげている。

【令和2年度に実施した主なメンター研修】

- 4年次メンター長による体育科（マット運動）の指導
- 4年次メンター長による道徳科授業研究
- 道徳教育推進教師による道徳科学習指導案検討

Ⅲ 専科指導教員及び加配教員の役割を明確にした効果的な活用

本校では、学校力向上に関する総合実践授業の指定により配置された加配教員の効果的な活用に努めている。加配教員の役割を明確にし、加配教員が指導力を発揮することが、学習内容の理解につながり、学力向上が実現できる。また、専科指導教員による授業は、学級担任の教材研究等の時間や児童と向き合う時間の確保に結び付いている。

1 専科指導教員・加配教員の役割（○）と活用内容（◎）

【外国語科専科指導教員】

- ・昨年度まで外国語科教員として中学校で指導
- 第5、6学年の外国語科を指導（3校兼務）
- ◎学級担任はT2として、特にパフォーマンス評価をはじめとする評価方法など、外国語の指導方法を学ぶことができる。

【理科専科教員】（非常勤講師）

- ・中学校理科の免許を有し、中学校で長年指導
- 第5、6学年の理科を指導
- ◎理科の時間において学級担任は教材研究等の学年・学級の業務や公務分掌等の業務を行うことができる。

〈児童〉

- ・専門的な知識や技能をもった専科教員による指導により、各教科の興味・関心が向上
- ・個に応じた指導の充実による知識や技能の確実な習得
- ・学習規律の定着

〈学級担任〉

- ・複数の教員による児童理解を共有した個に応じた指導の実現
- ・授業力・指導技術の向上
- ・専科教員による授業時間による教材研究や児童と向き合う時間の確保

学校力
向上

【指導方法工夫改善加配教員】

- ・昨年度まで本校の特別支援教育コーディネーター
- 個の学習状況に応じた指導による学習内容の確実な定着
- ◎児童一人一人の学習状況を学級担任と情報共有
- ◎教職員対象の「T・T通信」を発行し、理解に課題のある児童の指導や支援の方法について情報提供

【指導方法工夫改善加配教員（学校力加配）】

- ・2名の再任用教職員
- 第1、2学年の国語科及び算数科で学級担任とのチームティーチング
- ◎学習規律の確立（鉛筆の持ち方、姿勢等）、文字指導や数概念の習得等の個別の学習支援
- ◎スタート・カリキュラムの効果的な活用の支援

2 専科指導教員及び加配教員による取組の普及・啓発

専科指導教員や指導方法工夫改善教員が、通信を発行し、取組状況の周知と共有が図られている。

配付対象が保護者や児童の場合は、学習内容の理解が深められるよう、学習のねらいや取組の状況、評価の観点・内容などを掲載している。また、配付対象が教職員の場合は、指導力向上につながるよう、教科書の特徴や授業の組み立て方、児童の特性に応じた指導方法の工夫など、指導のヒントとなる内容が紹介されている。



～(NO.17 続き) 算数障害に困難がある児童への学習支援の考え方について～

まず、算数科でどこ(何が)が苦手なのかを調べます。その上で、能力の高いところを活用して、能力の低いところを補うことで学習支援を進めることが基本となります。

まず「算数が苦手なお子さんは、目で見て全体を把握する能力が弱い(前者)、つまり視空間認知能力や同時処理能力が低い場合と、順を追って処理する能力が弱い(後者)、つまり連続処理能力が低い場合と考えられます。前者のタイプは、マス目のあるノート(マス目の大きさは実態に準じて)を使って筆算に取り組ませます。後者のタイプは、計算の手続きを文章にした手順表(手元に置いておきます)をつくって計算させてみると、上手くいくことがあります。

次に、2年生で学習する九九でつまずくお子さんが多いのではないのでしょうか。まさに今、本校の2年生が九九を開始したところで、児童によっては5の段から苦労しています。九九をリズムカルな音で覚えるのは、いい方法だと思います。ただ、聴覚的な短期記憶が弱いお子さんにはすごく苦しいものと考えられます。そういうお子さんは、暗算認知は弱いけれど視覚認知はできることが多いため、目で見て分かるように九九の表を使い、表を見ながら「かける数の列の数字はどういうふうに変化していくかな?」「かけられる数はどう変わるかな?」「なめはどうかかな?」「答の列は?」と聞いて、お子さん自身で考えさせます。こうすることで、表のなかでどのような式や答えがどんな位置にあるのかということが理解できれば、九九は言えなくても(暗記できなくても)、九九が理解できないということはないはずです。

3年生から学習する分数はどうでしょうか。知的能力の境界域にあるお子さんにとって分数はとても難しいものの1つとされています。例えば「2分の1と3分の1」では3分の1の方が大きいと答えるお子さんが多いです。これまでは学習では、2よりも3が大きいのですから無理もありません。具体物を数という抽象的なものに結びつけて考える練習をする必要があります。

算数障害のお子さんで文章題が苦手な場合、文章に書いてある状況を視覚的なイメージとして思い浮かべるというイメージ化がうまくできないことが多くあります。文章題をいくつかの場面に分けて、場面ごとに自分がイメージすることのできる簡単な絵や図にかくことが大切です。自分でイメージを考えるとというプロセスを大切にします。ほかの課題でも同じように自分で考えることが大切です。低学年から多少時間がかかってでも本人に考えさせる時間を確保することが重要です。

教科としての算数というのは「できるか」「できないか」で、明確に評価されてしまいます。このことから、算数障害のお子さんはもちろん、算数に困難がある境界域のお子さんの多くは自尊心が傷つきやすく、学習そのものを嫌いになっていきます。暗記することが不可能な算数障害を抱えている児童に計算問題をくり返し解くようなドリル形式の学習をさせても、基本的にはこの課題は解決されません。むしろ算数がどんどん嫌いになるだけです。

私は、算数障害で暗算ができないお子さんは、計算する部分は、かけ算表や電卓やICTに頼ってもいいのではと考えています。(合理的配慮) その分、数学的思考を伸ばすことに力を入れたと考えています。この子どもたちにとって大切なのは、早く正確に計算ができることだけではなく、将来の自立した生活のために、生活のいろいろな場面で数学的な考え方を生かせるようになることだと思います。ぜひ算数テストの際に合理的配慮を検討してください。

【算数T・T通信】(教職員向け)

- ・特別支援教育コーディネーターの視点から算数科の学習に課題がある児童の特徴をいくつかのパターンで紹介し、合理的配慮も含めた支援の在り方について解説。

Vol. 5
September
(9月)

English 通信

英語科専科
吉井真裕

「フォニックスを学んでいます!」

フォニックスとは、発音と文字の関係性を学ぶ音声学習法で、もともと英語圏の子どもたちに読み書きを教えるために開発されたものです。まずは、5年生で、アルファベットにはその名前と音の二つがあることを知り、例えば、「B」には「ビー」という名前と「ブ」という音があります。それぞれの文字の音を知ることによって、音の足し算をしてある程度の単語の読み方を予想して読むことができるようになります。文部科学省によると、小学校では複雑なルールは取らないで、音で十分に関心を持って言葉のつづりを見て、「あつ、きつとあの単語のことだろうかな?」と分かる程度でいいとされています。でも5年生・6年生とも、アルファベット26文字の音はすべて分かるようになり、知らない単語でも音の足し算を思い浮かべて予想しながら読めるようになっています。

また、日本語にはない英語の発音の仕方にも挑戦しています。これまでに「i」「e」「r」「y」「th」の発音の仕方を学びました。以前より早く英語に触れていることもあって、今の小学生は英語の発音がとても上手だなと感じています。

このように学習評価しています。

小学校では今年から評価の観点が多岐にわたる科目で統一されました。観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つです。少し分かりにくいので、外国語科のそれぞれの観点の内容(1学期または前期)と、評価の場面を簡単に表にまとめてみました。

観点	内容	評価の場面
知識・技能	・学習した単語や表現の意味を理解し、それら(単語・文単位)を聞いて内容が分かったり、その表現を使って自分の考えを言えた(文単位)。 ・アルファベットの形や音を認識できた。	<単元テスト> ・短い文や単語を聞いて、その文の内容を表す絵を選べた。 ・アルファベットの音や名前(6年生)を聞いてアルファベットを選んだり、書いたりすることができた。
思考・判断・表現	・学習した単語や表現の意味を理解するとともに、言葉以外のさまざまな情報を使いながら、比較的長い英語のやり取りを聞いて内容が分かった。 ・学習した内容を使いながら、自分の考えを場面に適した形で相手に伝えることができた。	<単元テスト> ・比較的長い会話や文章を聞いて、必要な情報を聞き取ったり、全体の内容を把握したりできた。 <発表・オーラルテスト(録音して評価)> ・与えられた場面に適した内容で、自分の考えを話すことができた。
主体的に学習に取り組む態度	・英語を身に付けるために必要な態度を理解し、実践することができた。 ・自分の学習状況を把握し、できていることや改善に向けて必要なことを実践できた。	<単元テスト> ・学習の振り返りで自分の学習状況を把握できた。 <授業・発表・オーラルテスト> ・適切な声量やジェスチャーを使いながら意欲的に取り組んでいた。

9・10月にできるようになること

5年生	6年生
・英語での進歩 ・物ごとの位置や場所を伝える ・自分のあこがれる人物や家族の紹介	・豊田・北海道・日本の名所や名産などの紹介 ・20年後の世界で活躍する自分になりきっての自己紹介 ・ハロウィンのカボチャ(ジャック・オランタン)が作れるようになる

【外国語専科通信】(保護者・児童向け)

- ・フォニックスの取組について、文字の音を知ること、ある程度英単語を読むことができるようになることを紹介。学習評価については、観点・内容・評価場面について保護者にも周知。

【専科指導教員等による教職員と保護者・児童向けの通信】

IV 成果と課題

- 初任段階教員を育てる環境や組織を再編したことで、学年主任によるOJTを通して、初任段階教員が自立意識を高め、学級経営や授業準備などに意欲的に取り組む姿が多く見られ、各教員がこれまでの取組の成果と課題を踏まえた学級経営に取り組むことができた。
- 専科指導教員や加配教員の役割を明確にし、効果的に機能させることで、学力向上はもとより個に応じた指導の充実が図られ、質の高い教育実践を推進することができた。また、専科指導教員等の活用により、教材研究の時間や児童と向き合う時間が確保され、業務改善につながった。
- 今年度は、新型コロナウイルス感染症対策を講じる中で授業時数等の制限が生じ、児童が専科指導教員や加配教員の指導を受ける場面が保障できなかった時期があったことから、今年度の状況を十分に検証し、様々な状況に対応できる時間割を作成しておくなど、次年度に向けた準備を行う必要がある。
- 専科指導教員や加配教員による指導について、学校評価や児童アンケート等から検証するとともに、指導の成果や課題を見取るための検証方法や数値目標を設定するなど、取組の充実を図る必要がある。